

豆なんか痛くない

昭和五十六年度 五年 女児

「痛い。」ときけんでしまった。

そのときは、一回目の応援歌練習だった。そしたら旗の棒が、豆のつゆでよごれていた。ひっしに痛さをこらえて、頑張った。ますます痛さが、強く感じて来た。そして畠中先生に、治療してもらった。そのとき白組のかん部は、ひっしに頑張っていた。私は、

「赤組のみんなも、声をカラカラにしていっしょうけんめに頑張っているのだ、豆なんかちっとも痛くない。」と自分に勇気づけるように力をこめて、旗をふった。みんなの顔が、とても明るく見えた。そして応援が終わって、後片づけをしているとき、豆の痛さが、じーんと感じてきた。でもくじけては、五年生の代表がつとまらないと自分に言い聞かせた。

いよいよ、運動会が来た。

「頑張るぞ。六年生に負けないぞ。」と思いました。

一回目は、旗をふる歌だった。私は、五年生の代表なので、六年生に負けないで、頑張った。あまり頑張りすぎて、ま

た豆がでてきてしまった。でも私が、へこたれたら五年生の代表が、かけてしまうし、みんなの応援だって元気がなくなってしまうだろうと思った。三個目の豆が、痛み出して来た。でも頑張れるだけ頑張ってみたが痛さのあまり私は、

「応援団ってとっても苦しいもんなんだなあ。」と、思いました。でも自分でひき受けたのだから、応援団が、へこたれたら白組に負けてしまう。そして白組が、ガッツなら、赤組は、根性だと思った。

昼ごはんのとき、父に豆を見せたら、
「こんなもの痛くね、頑張ってこいよ。」て、後からポンと背中を、たたかれた。そのときの父の言葉で、また勇気がでてきた。

「最後の応援だ。」と思っではりきった。

紅白リレーのときは、みんな前に出て応援していた。旗をふるたびに父の言葉が私を勇気づけた。紅白のリレーで何十点かの差で勝ちました。

最後まで応援をやっていて本当に良かった。父の強い言葉がなければ、ここまでやってこれなかったと、思いました。後かたづけをして、教室に行ってみるとみんなとても

にぎやかでした。賞状と鉛筆をもらって急いで家に帰りま
した。

家に帰ると、

「よく頑張ったね。すごくめだったけえ。」と父の明るい
顔が、目の中に入ってきた。本当に、父の言葉が運動会に
役だったし、なんだか父が私の後について、「頑張れよ。」と
言っている気がしたから最後までやれたのだと思います。